

# 毛利貞斎『増続大広益会玉篇大全』 の合口拗音ハ表記について

佐 藤 進

## 一 漢字音の合口拗音ハ表記

本論で扱うのは、漢字の日本漢字音、いわゆる音読みのなかに見られる合口拗音のカナ表記にかかわる問題である。

拗音の現代の表記では「キャ・キュ・キョ」のように小さい「ヤ・ユ・ヨ」を用いる。過去にさかのぼると、ヤ行の拗音のほかに、「菓子クワシ」「三月サングワツ」のようにワ行の拗音があった（つい先ごろまでは方言でそのように発音されたという）。このヤ行拗音を開拗音、ワ行拗音を合拗音という（日本語学会 2018）。合拗音は明治に入ると拗音性を失い、「菓子カシ」「三月サンガツ」のように直音になってしまった。

開口合口の内容は中国音韻学でも使う用語であるが、中国音韻学の開口合口と、日本語学で使う開口合口とはそのまま重なり合うものではない。しかしながら、中国音韻学の合口と切り離して扱うのは、漢字音の由来等を論ずる際の手がかりを失うことになるので、本論では中国音韻学の合口の枠組みを利用した<sup>(注1)</sup>。単に合拗音と言わずに、合口拗音という所以である。

上に示したように、合口拗音はワ行拗音であるというのが一般的であるが、ワを使うほかにハを使うことがある。合口拗音ハ表記は、日本の古字

書などに見えるのであるが、そこに記述された和訓の研究は多数の積み重ねがある一方、漢字音に関することについては手薄であり、本格的に論じられることはほとんどない。漢字音拗音のハ表記は、訓読み、すなわち和語の「いわ（岩）」をかつて「いは」とかな表記したこととは別の問題であって、決して同日に談すべきことではない。

室町時代一五八九年に、キリシタンの手によって成立刊行された辞書『落葉集』では、「光くハう」「果くハ」「月ぐハつ」などのように、一貫して「ハ」表記が使われた（ハはカタカナではなく、「は」の変体仮名である）。その理由について筆者は、第一に、当時の「ハ」はすばめた両唇摩擦で発音されたこと。第二に、『日葡辞書』などのローマ字では quau・qua・guan のように表記されたが、『落葉集』はカナ表記にするために、たとえば「願」guan を「ぐあん」とすると「愚案」との区別がつかなくなるので、ローマ字を単純にカナ転写する「ぐあん」を避けて「ぐはん」と転写した。そのほうが、かえって当時の口語音に近づくことが出来たと論証した（佐藤進 2014）。

また、佐藤進 2014 では、『保元物語』の金刀比羅宮旧蔵の写本（岩波書店の旧日本古典文学大系の底本）には日本人にはそこまで必要がないほどの精密な振り仮名が施されており、その振り仮名の工具書として使われたのがハ表記の『落葉集』であったことを立証し、かつ、『落葉集』採用の理由が、欧人宣教師にとっては『保元物語』が日本語学習の良質な教材の一つとみなされたからではないかと論じた。

合口拗音ハ表記について、従来ほとんど見過ごされてきた問題ではあるが、『落葉集』と『保元物語』との関連、すなわち、欧人宣教師と軍記物語の関係を裏付けることが出来たように、文字文化事象の解明に資するところが小さくないのである。

## 二 毛利貞斎と『増続大広益会玉篇大全』

元禄第五壬申暦大呂中旬、すなわち一六九二年十二月中旬の刊記がある『増続大広益会玉篇大全』という漢字字書がある。宋代に改編された『玉篇』に、明代の『字彙』などによって増補し、漢字音や和訓を付した漢字字典である。なお、『玉篇』はもと梁の顧野王が五四三年に詳密浩瀚なものを完成させたが、中国ではすでに失われて、日本に原本の十二～十三%が残るのみである。それを原本『玉篇』という。宋代の一〇一三年に改編された『玉篇』の正式名称は『大広益会玉篇』といって、大広益会と冠してはいるが、語釈や例文は大幅に削られて、原形をとどめない。

『増続大広益会玉篇大全』はその『大広益会玉篇』に増続した大全であるという意味になろう。編者は毛利貞斎であることが、元禄第四辛未暦大呂穀旦、すなわち一六九一年十二月吉日の日付を持つ「凡例」（首巻に収録）に示されている。「洛滄隠士毛利貞斎編」。洛滄（ラクゼイ）は洛水のこと（注2）、本邦では京都の異名として書舗の所在地名などに使われた。「隠士」と自称するのは、官職につかず、講義や著述を業としていたからであるらしい。

毛利貞斎の生卒の確かなことは不詳である。貞斎と『増続大広益会玉篇大全』の書誌については、もと慶應義塾大学斯道文庫長・関場武教授の論文に詳しい（関場武 1977）。それによると、各種辞事典の貞斎の記事は、池永泰良『諸家人物誌』（寛政四年刊）の以下の記述を踏襲するという。

「毛利貞斎、名ハ瑚珀、字虚白、貞斎ハ号ナリ、浪花ノ人、京師ニ舌講ス、諸書俚諺抄ヲ著シテ梓行スルニ、皆自ラ筆ス、其敦厚ナルヲ見ツヘシ、著述甚富テ、業、字遯庵ト雁行ス」

記述の最後にある字遯庵とは、江戸前期の朱子学者・宇都宮由的（一六

三三-一七〇九) のことである。『先哲叢談』巻之四に伝がある。また、上の記述に続いて貞斎の著作三十二点を列挙しているという。

貞斎の生卒は不明ながらも、関場教授は貞斎の著述を刊行年順に考察して、その活動期間は延宝三年(一六七五)から享保十年(一七二五)に至る約五十年であったとしている(関場武 1977)。してみると、元禄四年(一六九一)の『増続大広益会玉篇大全』は、十分に経験を積んで、しかも体力気力の衰えが見えない少壮の時期の仕事であったわけである。

『増続大広益会玉篇大全』は初版以来、(一)元禄五年版・後印二種、(二)享保二十年版・後印三種、(三)安永九年版・後印二種、(四)天保五年版・後印二種、(五)秋田藩明德館版・後印二種、(六)無刊記本二種、(七)嘉永七年版・後印十七種、(八)文久元年版、(九)明治五年版・後印二種、(十)明治八年版、(十一)明治十年版・後印二種、(十二)明治十一年版、(十三)明治十三年版・後印六種、(十四)明治十六年版・後印五種、(十五)明治三十八年版、(十六)明治四十二年版、(十七)明治四十四年版、以上のように多くの版を重ねた(関場武 1977。なお後印の数については、関場武『近世辞書論攷』収録時に補充されたものを含む)。江戸明治の漢字字典と言え、まず『増続大広益会玉篇大全』に指を屈するのである。ちなみに筆者の家蔵は秋田藩明德館版の初印十二冊本と明治三十八年版洋装一冊本である。

### 三 『増続大広益会玉篇大全』の合口拗音ハ表記とワ表記

ここでは、『増続大広益会玉篇大全』の合口拗音ハ表記とワ表記を掲げる。手元では表組を作成したが、誌面の版式にはおさまりが良くないので、以下に簡条書き形式で示す。

クハ・クワ等の音読みの右、【】内に示したのが、その読みが与えられ

採録すべき文字で、ユニコードで入力できなかったものもあるが、そういう僻字は十指に満たなかった。省略しても差し支えないものと思う<sup>(注3)</sup>。

採録字の右に ( ) で示した二字は、いくつかの読みがある中で、その読みが与えられた根拠となる反切である。まれに「音某」のような直音表記（非反切表記）もある。

【】の次につけたコメントは、誤刻等のメモである。

### ●果攝合口一等

平声戈韻

見母

クハ【戈𪔐𪔑𪔒𪔓𪔔𪔕𪔖𪔗𪔘𪔙𪔚𪔛𪔜𪔝𪔞𪔟𪔠𪔡𪔢𪔣𪔤𪔥𪔦𪔧𪔨𪔩𪔪𪔫𪔬𪔭𪔮𪔯𪔰𪔱𪔲𪔳𪔴𪔵𪔶𪔷𪔸𪔹𪔺𪔻𪔼𪔽𪔾𪔿𪕀𪕁𪕂𪕃𪕄𪕅𪕆𪕇𪕈𪕉𪕊𪕋𪕌𪕍𪕎𪕏𪕐𪕑𪕒𪕓𪕔𪕕𪕖𪕗𪕘𪕙𪕚𪕛𪕜𪕝𪕞𪕟𪕠𪕡𪕢𪕣𪕤𪕥𪕦𪕧𪕨𪕩𪕪𪕫𪕬𪕭𪕮𪕯𪕰𪕱𪕲𪕳𪕴𪕵𪕶𪕷𪕸𪕹𪕺𪕻𪕼𪕽𪕾𪕿𪖀𪖁𪖂𪖃𪖄𪖅𪖆𪖇𪖈𪖉𪖊𪖋𪖌𪖍𪖎𪖏𪖐𪖑𪖒𪖓𪖔𪖕𪖖𪖗𪖘𪖙𪖚𪖛𪖜𪖝𪖞𪖟𪖠𪖡𪖢𪖣𪖤𪖥𪖦𪖧𪖨𪖩𪖪𪖫𪖬𪖭𪖮𪖯𪖰𪖱𪖲𪖳𪖴𪖵𪖶𪖷𪖸𪖹𪖺𪖻𪖼𪖽𪖾𪖿𪗀𪗁𪗂𪗃𪗄𪗅𪗆𪗇𪗈𪗉𪗊𪗋𪗌𪗍𪗎𪗏𪗐𪗑𪗒𪗓𪗔𪗕𪗖𪗗𪗘𪗙𪗚𪗛𪗜𪗝𪗞𪗟𪗠𪗡𪗢𪗣𪗤𪗥𪗦𪗧𪗨𪗩𪗪𪗫𪗬𪗭𪗮𪗯𪗰𪗱𪗲𪗳𪗴𪗵𪗶𪗷𪗸𪗹𪗺𪗻𪗼𪗽𪗾𪗿𪘀𪘁𪘂𪘃𪘄𪘅𪘆𪘇𪘈𪘉𪘊𪘋𪘌𪘍𪘎𪘏𪘐𪘑𪘒𪘓𪘔𪘕𪘖𪘗𪘘𪘙𪘚𪘛𪘜𪘝𪘞𪘟𪘠𪘡𪘢𪘣𪘤𪘥𪘦𪘧𪘨𪘩𪘪𪘫𪘬𪘭𪘮𪘯𪘰𪘱𪘲𪘳𪘴𪘵𪘶𪘷𪘸𪘹𪘺𪘻𪘼𪘽𪘾𪘿𪙀𪙁𪙂𪙃𪙄𪙅𪙆𪙇𪙈𪙉𪙊𪙋𪙌𪙍𪙎𪙏𪙐𪙑𪙒𪙓𪙔𪙕𪙖𪙗𪙘𪙙𪙚𪙛𪙜𪙝𪙞𪙟𪙠𪙡𪙢𪙣𪙤𪙥𪙦𪙧𪙨𪙩𪙪𪙫𪙬𪙭𪙮𪙯𪙰𪙱𪙲𪙳𪙴𪙵𪙶𪙷𪙸𪙹𪙺𪙻𪙼𪙽𪙾𪙿𪚀𪚁𪚂𪚃𪚄𪚅𪚆𪚇𪚈𪚉𪚊𪚋𪚌𪚍𪚎𪚏𪚐𪚑𪚒𪚓𪚔𪚕𪚖𪚗𪚘𪚙𪚚𪚛𪚜𪚝𪚞𪚟𪚠𪚡𪚢𪚣𪚤𪚥𪚦𪚧𪚨𪚩𪚪𪚫𪚬𪚭𪚮𪚯𪚰𪚱𪚲𪚳𪚴𪚵𪚶𪚷𪚸𪚹𪚺𪚻𪚼𪚽𪚾𪚿𪛀𪛁𪛂𪛃𪛄𪛅𪛆𪛇𪛈𪛉𪛊𪛋𪛌𪛍𪛎𪛏𪛐𪛑𪛒𪛓𪛔𪛕𪛖𪛗𪛘𪛙𪛚𪛛𪛜𪛝𪛞𪛟𪛠𪛡𪛢𪛣𪛤𪛥𪛦𪛧𪛨𪛩𪛪𪛫𪛬𪛭𪛮𪛯𪛰𪛱𪛲𪛳𪛴𪛵𪛶𪛷𪛸𪛹𪛺𪛻𪛼𪛽𪛾𪛿𪜀𪜁𪜂𪜃𪜄𪜅𪜆𪜇𪜈𪜉𪜊𪜋𪜌𪜍𪜎𪜏𪜐𪜑𪜒𪜓𪜔𪜕𪜖𪜗𪜘𪜙𪜚𪜛𪜜𪜝𪜞𪜟𪜠𪜡𪜢𪜣𪜤𪜥𪜦𪜧𪜨𪜩𪜪𪜫𪜬𪜭𪜮𪜯𪜰𪜱𪜲𪜳𪜴𪜵𪜶𪜷𪜸𪜹𪜺𪜻𪜼𪜽𪜾𪜿𪝀𪝁𪝂𪝃𪝄𪝅𪝆𪝇𪝈𪝉𪝊𪝋𪝌𪝍𪝎𪝏𪝐𪝑𪝒𪝓𪝔𪝕𪝖𪝗𪝘𪝙𪝚𪝛𪝜𪝝𪝞𪝟𪝠𪝡𪝢𪝣𪝤𪝥𪝦𪝧𪝨𪝩𪝪𪝫𪝬𪝭𪝮𪝯𪝰𪝱𪝲𪝳𪝴𪝵𪝶𪝷𪝸𪝹𪝺𪝻𪝼𪝽𪝾𪝿𪞀𪞁𪞂𪞃𪞄𪞅𪞆𪞇𪞈𪞉𪞊𪞋𪞌𪞍𪞎𪞏𪞐𪞑𪞒𪞓𪞔𪞕𪞖𪞗𪞘𪞙𪞚𪞛𪞜𪞝𪞞𪞟𪞠𪞡𪞢𪞣𪞤𪞥𪞦𪞧𪞨𪞩𪞪𪞫𪞬𪞭𪞮𪞯𪞰𪞱𪞲𪞳𪞴𪞵𪞶𪞷𪞸𪞹𪞺𪞻𪞼𪞽𪞾𪞿𪟀𪟁𪟂𪟃𪟄𪟅𪟆𪟇𪟈𪟉𪟊𪟋𪟌𪟍𪟎𪟏𪟐𪟑𪟒𪟓𪟔𪟕𪟖𪟗𪟘𪟙𪟚𪟛𪟜𪟝𪟞𪟟𪟠𪟡𪟢𪟣𪟤𪟥𪟦𪟧𪟨𪟩𪟪𪟫𪟬𪟭𪟮𪟯𪟰𪟱𪟲𪟳𪟴𪟵𪟶𪟷𪟸𪟹𪟺𪟻𪟼𪟽𪟾𪟿𪠀𪠁𪠂𪠃𪠄𪠅𪠆𪠇𪠈𪠉𪠊𪠋𪠌𪠍𪠎𪠏𪠐𪠑𪠒𪠓𪠔𪠕𪠖𪠗𪠘𪠙𪠚𪠛𪠜𪠝𪠞𪠟𪠠𪠡𪠢𪠣𪠤𪠥𪠦𪠧𪠨𪠩𪠪𪠫𪠬𪠭𪠮𪠯𪠰𪠱𪠲𪠳𪠴𪠵𪠶𪠷𪠸𪠹𪠺𪠻𪠼𪠽𪠾𪠿𪡀𪡁𪡂𪡃𪡄𪡅𪡆𪡇𪡈𪡉𪡊𪡋𪡌𪡍𪡎𪡏𪡐𪡑𪡒𪡓𪡔𪡕𪡖𪡗𪡘𪡙𪡚𪡛𪡜𪡝𪡞𪡟𪡠𪡡𪡢𪡣𪡤𪡥𪡦𪡧𪡨𪡩𪡪𪡫𪡬𪡭𪡮𪡯𪡰𪡱𪡲𪡳𪡴𪡵𪡶𪡷𪡸𪡹𪡺𪡻𪡼𪡽𪡾𪡿𪢀𪢁𪢂𪢃𪢄𪢅𪢆𪢇𪢈𪢉𪢊𪢋𪢌𪢍𪢎𪢏𪢐𪢑𪢒𪢓𪢔𪢕𪢖𪢗𪢘𪢙𪢚𪢛𪢜𪢝𪢞𪢟𪢠𪢡𪢢𪢣𪢤𪢥𪢦𪢧𪢨𪢩𪢪𪢫𪢬𪢭𪢮𪢯𪢰𪢱𪢲𪢳𪢴𪢵𪢶𪢷𪢸𪢹𪢺𪢻𪢼𪢽𪢾𪢿𪣀𪣁𪣂𪣃𪣄𪣅𪣆𪣇𪣈𪣉𪣊𪣋𪣌𪣍𪣎𪣏𪣐𪣑𪣒𪣓𪣔𪣕𪣖𪣗𪣘𪣙𪣚𪣛𪣜𪣝𪣞𪣟𪣠𪣡𪣢𪣣𪣤𪣥𪣦𪣧𪣨𪣩𪣪𪣫𪣬𪣭𪣮𪣯𪣰𪣱𪣲𪣳𪣴𪣵𪣶𪣷𪣸𪣹𪣺𪣻𪣼𪣽𪣾𪣿𪤀𪤁𪤂𪤃𪤄𪤅𪤆𪤇𪤈𪤉𪤊𪤋𪤌𪤍

溪母

クハ【鍋捌料料稻箴藹蚪】

クワ【科窠】

羣母

グハ 【譌蹠】

クハ【觥（音訛）訛跽】

疑母

グハ【譌鰐鰓（午戈）】

クハ【舳（音訛）訛跣送（五禾）】

グワ【咄】

## 匣母

クハ【啍杯脉菜詠】

クワ【和禾穌】

グワ【禾（五吡）】

## 上声果韻

## 見母

クハ【盂棵縲縲螭裏褱録鞞鞞鯨】

## 溪母

クハ【𪔐（口果）棵（苦果）牒顆】

## 疑母

グハ【𪔐】

グワ【𪔐】

## 曉母

クハ【火𪔐】

## 匣母

クハ【𪔐沃瓢禍𪔐衲𪔐】

クワ【𪔐𪔐𪔐】

## 去声過韻

## 見母

クハ【𪔐𪔐𪔐𪔐（公𪔐）𪔐】

クワ【𪔐𪔐】

## 溪母

クハ【𪔐𪔐𪔐𪔐𪔐𪔐𪔐（𪔐𪔐）】

## 疑母

グハ【臥】

曉母

クハ 【泔貨】

匣母

クハ【絳】胡臥切を朝臥切に誤刻

クワ【和俵方】

### ●果攝合口三等

平声戈韻

溪母

クハ【倣舵】

疑母

グハ【梶趨鉋】

曉母

クハ 【靴靴】

クワ【呟】

匣母

クワ【銖】

### ●假攝合口二等

平声麻韻

見母

クハ【厠別室划（公禍）歌浅花焔（古誇）焔瓜罟蝸跏顗餽駙】

クワ 【姁媧眇縗】

溪母

クハ【𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔（苦媧）誇𠂔𠂔】







クハイ 【掛（古拐）】

溪母

クハイ 【岫摑撻魄𪔐】

疑母

クハイ 【隗】

曉母

クハイ 【悔燥魄𪔐】

匣母

クハイ 【偃庖殍魔𪔐（戸罪）𪔐（胡悔）𪔐】

去声隊韻

見母

クハイ 【𪔐（古誨）𪔐憤𪔐𪔐】

溪母

クハイ 【塊𪔐（苦對）𪔐（音塊）】

羣母

クハイ 【𪔐】

曉母

クハイ 【𪔐𪔐𪔐𪔐𪔐𪔐𪔐】

匣母

クハイ 【𪔐𪔐𪔐𪔐𪔐𪔐𪔐（音𪔐）𪔐𪔐𪔐𪔐𪔐𪔐（胡内）𪔐𪔐】

●蟹攝合口一等

去声泰韻

見母

クハイ 【𪔐𪔐（公外）𪔐𪔐𪔐𪔐𪔐𪔐𪔐（公外）𪔐𪔐𪔐𪔐𪔐𪔐𪔐

鱸】

溪母

クハイ 【鱸醜】

疑母

グハイ 【外】

曉母

クハイ 【噉（火外）徹鉞（呼會）鉞】

匣母

クハイ 【嶠旃會繪翹齧識醫（音會）遄】

●蟹攝合口二等

平声皆韻

見母

クハイ 【乖痺碰韮】

溪母

クハイ 【勑攢】

曉母

クハイ 【囁絺】

匣母

クハイ 【懷槐滾熨鞞】

クワイ 【淮】

去声怪韻

見母

クハイ 【卷啗怪拔攘菽黻缺鮓】

溪母



クハイ【経縑（胡卦）罍瓌瓌】

クハ【畫調霽鞋】

クワ【畫（胡卦）】

●蟹攝合口二等

去声夬韻

見母

クハイ【夬瓌】

溪母

クハイ【噲快瓊】

疑母

クハイ【寃】

曉母

クハイ【𤝵】

匣母

クハイ【話】

●蟹攝合口三等

去声廢韻

疑母

クハイ【躡】

曉母

クハイ【殍瘵錄】

●山攝合口一等

平声桓韻









●山攝合口二等

平声刪韻

見母

クハン【絲咍睥囁寔笄攔痕睥細罌羝（古關）鰓鰓關】

疑母

グハン【頑】

クハン【癰（五還）】

曉母

クハン【憊憊】

グハン【羣（呼關）】

匣母

クハン【剗壞褱戛環廬浚環賢還鍍鐸鐸鐸闌鬣鬣鸚鵡】浚字、玉篇は于元切・于頑切の二切、クハンは『広韻』の獲頑切によるもの

上声潯韻

匣母

クハン【皖皖睨】

去声諫韻

見母

クハン【串倌慣攢掞（公患）殞睥瞋芋（古患）輓遺鄴】

溪母

クハン【權】

羣母

クハン【權】

匣母

クハン【宦患湊獐豢獐郎】

●山攝合口三等

去声線韻

見母

クハン【卷】

曉母

クハン【輓】

●山攝合口三等

上声阮韻

見母

クハン【稊（九偃）】

去声願韻

見母

クハン【𦵏】「千」を「十」に作る

溪母

クハン【勸】

疑母

グハン【願願願願】

曉母

クハン【輓】

入声月韻

疑母



去聲宕韻

見母

クハウ【**擴曠**】擴字、クハウは『**広韻**』古曠切によるもの、大全の反切は古莫切

溪母

クハウ【壙嶺曠煥曠躋翫翫】

匣母

クハウ【縝鋳】

入声鐸韻

見母

クハク 【嶮麿濤郭（同鄣）鄣隴鷗】

クワク【彊】

溪母

クハク 【𪔐 (口郭) 𪔐 𪔐 𪔐 (同𪔐) 𪔐】

クワク 【藺】

曉母

クハク 【擢曜曜瘡耀藿霍鄣霍】

匣母

クハク【護懷樓（胡郭）濩燠啍穫獲藿鑊霍（胡郭）饕餮】

### ●宕攝合口三等

平聲陽韻

見母

クハウ【炆（呼汪）爨】

曉母



曉母

クハウ【洶翳颺】

匣母

クハウ【曠捏橫瀕竄橫諠鉦鉦鑄鑠颯颯颯】

上声梗韻

見母

クハウ【礩礩鑛】

去聲映韻

匣母

クハウ 【嶮】

入声陌韻

見母

クハク 【新職讒越（霍讒）】

曉母

クハク【割情擣】

### ●梗攝合口二等

平声耕韻

見母

クハウ【腰】

曉母

クハウ【匍掬碯鎬】

匣母

クハウ【宏嶮恠法法瀆礧礧宏絃絃聃】



文字であった。つまり、九五％がハ表記、五％がワ表記である。非常に明確な傾向で、ハとワの「揺れ」というには偏り過ぎている。『増続大広益会玉篇大全』の合口拗音については、原則としてハ表記であり、時にワ表記が混入したと言って差し支えない。

#### 四 『増続大広益会玉篇大全』の合口拗音ハ表記のよって来るところ

毛利貞斎は『増続大広益会玉篇大全』における合口拗音の漢字音表記に際して、該当字の九五％をハ表記にした。

貞斎の「凡例」には、音訓の付け方について「予 贅する所の音訓、舊本の反切（ホンゼツ・カヘシ）註釋に根（もとづ）く」という。旧本の反切というのは『大広益会玉篇』のことである。ただこれは原則論であって、たとえば緩字の場合、『大広益会玉篇』は于元切・于頑切の二切なのでエンとなるが、その上、貞斎は『広韻』の獲頑切によってクハンの読みを加えた。ただし、その反切は追加していない。それはともかく、これだけ多量の漢字に音と訓を与える参考文献は、今日なら『類聚名義抄』や『色葉字類抄』や文明本『節用集』などの古写本の影印本が利用できるが、江戸前期ではそうも行かない。当時であって貞斎が参照した漢字音つきの字書類は何だったかを考えたい。

音読み訓読みを添える『玉篇』がらみの字書としては、室町時代に盛行して、江戸時代に整版が刊行された『倭玉篇（ワゴクヘン）』がある。岡井慎吾 1933 には写本刊本四十数点の紹介がある。また、岡井慎吾 1934 には、江戸時代の刊本には三十数種類あるとの報告がある。ただ岡井博士の報告は戦前の調査であって、戦後のものとしては中田祝夫・北恭昭 1966 に、写本三十数種、刊本九種（後で紹介する『小玉篇』を含む）が現存す



るという。

中田祝夫・北恭昭 1966 はそのうちの慶長十五年刊本の影印をして、索引を付したものである。なお、該書は内閣文庫蔵で、今は国立国会図書館デジタルコレクションで画像が見られ、ダウンロードが可能である。

いま慶長十五年版『倭玉篇』から合口拗音のハ表記をひろうと、クハ【𪛗𪛖𪛗𪛖】、クハイ【𪛗𪛖𪛗𪛖𪛗𪛖】、クハウ【𪛗𪛖𪛗𪛖𪛗𪛖𪛗𪛖】、クハク【𪛗𪛖𪛗𪛖𪛗𪛖𪛗𪛖𪛖𪛖】、クハン【𪛗𪛖𪛗𪛖𪛗𪛖𪛗𪛖𪛖𪛖𪛖】、以上である。つまり、原則としてワ表記であって、ハ表記は「揺れ」の範囲にとどまると言ってよい。貞斎がハ表記を編集方針の原則とするほどの影響力を持ったとは言えない。

『倭玉篇』の刊本の中でハ表記が比較的に目立つのは、慶長十年刊、夢梅の編写した夢梅本である<sup>(注5)</sup>。中田祝夫・北恭昭 1976 の「索引」は和訓のみが収録され、漢字音は捨て去られているので、影印本から採集するほかない。ここでは夢梅本の上中下三巻のうち、中巻からひろい上げたものを下に掲げる。ハ・ワ両表記の傾向を観察するにはそれで充分であろう。ちなみに、国立国会図書館デジタルコレクションでは中巻のみが閲覧可能である。

[illegible]

クハイ【蛸迴遑邪隗噲噴徊頰類旡孃】

グハイ【阮嚙】

クハウ【蟻鄴鄧鄺郾喹曠咭宏宏徨輶惶】

クハク 【郭嘯頤轡】

クハツ【蝸蛸适吟船嬭】

クハン【𪛗款歡還還追𪛗鄺鄺院暖啗院奐寬寔窵串煩輶轡嬭嬭】

グハン【沅顙願頑妩】

クワ【蝸蝓蝌蟳貨歌攸過過蕩炆和吹另寡窠孀姁媧媧】

グワ 【咄】

クワイ 【魁岐邨鄮頤繪】

クワウ 【蝗遑隍究蝗】

クワク 【螻鄮】

クワン 【蜺貳贅嚙宦官寰窻】

以上のように、二群に大きく分かれ、ハ表記を原則としたとは言えない。貞斎の編集方針のモデルになったのは、夢梅本を含めて『倭玉篇』ではあり得ない。

『玉篇』を名乗る先行字書にこだわる必要もあるまいと思うが、最後に、『落葉集』に含まれる『小玉篇』に着目してみたい。

『小玉篇』は『落葉集』の附篇として、いったん本体が出来てから編集印刷されたものである（土井忠生 1971）。現存する『落葉集』の諸本六点、断簡二点については土井洋一 1986 が詳しいが、現存諸本六点のうち『小玉篇』を含むのは、ローマイエズス会本部蔵本・大英博物館蔵本<sup>(注6)</sup>・スコットランドクロフォード家蔵本・天理図書館蔵本の四点である。

『小玉篇』の冒頭にある前書きには、その編纂意図を次のように述べている。

「右落葉集は字のこゑを用ひていろはをついで、色葉字集はよみを以て記すれば、読こゑを知て字のすがたをしらざる時の所用をなすといへども、文字のかたちを見て其よみこゑをしるに道なき便として、右両編の内より今又此せばき玉篇を編畢」

『落葉集』の本体とも言うべき本編の音読み（＝こゑ）いろは順「落葉集」と訓読み（よみ）いろは順「色葉字集」に出現する漢字を、字形から検索が可能なように、改めて部首順に配列したものである。「せばき玉篇」つまり小さな玉篇と、へりくだった命名をしたのは、「分量の輕少と卑下の意をこめて」のことであるらしい（土井忠生 1971）。「分量の輕少」とはどれくらいのものか、手近な解説書類には具体的な字数を掲げないので、

いま倉卒にカウントしてみると二三三三字であった。室町時代にキリスト教の布教に役立たせるための常用字として考えると、現代日本語の常用漢字の字数、二一三六字の約一割増であって、かなり妥当な収録字数であると言える。なお、部首の数は一〇四、一〇五番目には配属の厄介なもの一九五字を「類少字」としてまとめている<sup>(注7)</sup>。

その二三三三字の中で、合口拗音字は下がすべてで、一貫してハ表記を採り、ワ表記は皆無である。なお漢字の字形は『落葉集』では行書体で印刷された。

クハ【瓜戈火花咄貨禾科果菓課誇袴掛鍋過瓦】

グハ【臥】

クハイ【灰徊廻槐塊会鱠絵怪懷贖悔晦】

クハウ【光荒皇遑広】

クハク【郭鶴】

グハチ【月】

クハツ【活滑】

グハツ【月】

クハン【串官管棺冠翫関寛貫鑑環卷換喚緩観飲】

グハン【飲頑丸願】

大切なことは、「揺れ」がなく、100% がハ表記であるという事実である。その編集方針が、毛利貞斎の九五% ハ表記に影響を与えたのではないかと考える。

どういう表記を基準とするかということが決まれば、あとは『大広益会玉篇』や『字彙』の反切に従って音読みを与えるだけである。『落葉集』は稀覯な字書ではあったが、幕末にアーネスト・サトウが江戸の古書肆で求めることが出来たように、江戸前期に入手が全く不可能であったとも思われない。確かな記録はないが、貞斎は『小玉篇』を筆写して参照したと

も想像できる。

前章の最後の部分で、本来の開口を合口扱いした例として鶴字を挙げた。合口扱いにするだけでも決断を要する問題である上に、数ある古字書の中で、合口で、しかもクハクとするのは『落葉集』が唯一である。身近な漢字であるだけに、『落葉集』と貞斎の間に強い紐帯を感じざるを得ない。

## 五 『増続大広益会玉篇大全』合口拗音ハ表記のその後

元禄五年に世に出た『増続大広益会玉篇大全』は、先に紹介したように、江戸明治を通じて数多くの版が行われた。そうとなれば、その後の合口拗音ハ表記が世上に大きな影響を与えたと考えて不思議はない。実際はどうであったか。

まず、『増続大広益会玉篇大全』刊行後の貞斎自身の漢字音研究に、三点の『韻鏡』の研究刊行があった（福永静哉 1992）。福永静哉 1992 には一章を設けて貞斎の『韻鏡』研究を分析しているが、そこに収める『韻鏡袖中秘伝抄』の「直音拗音七音配當圖」を見るにクワ表記を採っている。当時、『韻鏡袖中秘伝抄』に先立つ数多くの『韻鏡』研究書が存在した由で、恐らくはそれらのワ表記を踏襲したものと思われる。

安永五年（1776）、本居宣長が『字音假字用格』において漢字音の在り方を論じて、後世に大きな影響を与えた。そこでは合口拗音ハ表記について「下中ノわ之假字」という項目を立てて以下のように述べている。「わくわ くわう くわい くわん くわく くわつ、右ノ諸音凡テわノ假字ナル事、上ノ第三會ノ圖ニテ明ラカ也、はノ假字ヲ書クハ大ニヒガコト也【凡テ三字ニ書ク字音ノ中ノ假字ハ、喉音ノや行わ行ノ字ニ限レルコト也】」（大野晋 1975）。ハ表記は「大ニヒガコト也」として退けられた。

本居宣長の批判によってハ表記は姿を消したかということ、事態はそれほ

ど簡単ではない。たとえば、安永九年（1780）、都賀庭鐘の校訂で『康熙字典』が翻刻刊行された（都賀の「序」は安永戊戌七年）。この『康熙字典』は単純な翻刻ではなくて、見出し字に漢字音を付し、本文に訓点を加えて刊行された。その合口拗音については、一貫してはいないがハ表記が見られるのである。たとえば、官クハン關クハン、一方、光クワウ廣クワウ。

また、元禄九年初刊で、江戸明治に盛行した単字字典『文選字引』というものがある（山田忠雄 1981）。その中にも、丸グハン乖クハイなどが見られ、一方、串クワン光クワウも混在する<sup>(注8)</sup>。ちなみに、鶴字は『康熙字典』カク、『文選字引』クハクであった。

翻刻『康熙字典』や『文選字引』などについては興味が引かれるが、その全面的な調査報告は次の課題にしたい。

## 【注】

- 1) 十六摂・開口合口・四等・四声・二百六韻・三十六声類という枠組みであるが、具体的には、語言研究所 1981 によった。ちなみに、この枠組み「摂・開合・等・調・韻・声」を用いて、ある漢字の音韻情報を定義することを「音韻地位」という。例えば「家」は「假開二平麻見」と表す。個々の漢字発音の方言差異などを表現するときに便利である。
- 2) 「洛澁」は鄭道元『水経注』巻十五「洛水」に「南據嵩岳、北帶洛澁」と作る対句に出てくるものである（「九山廟」前の碑文の一部）。「嵩岳」に対する「洛澁」なので「洛水」と考えて間違いない。ちなみに、貞斎のほかの著作では「洛汭（らくぜい）」「洛下」とも書かれている（関場 1977）。
- 3) ユニコード以外の文字はかなり少ないが、食部には例外的に多く、声府だけをメモしておく、求・科・黄・過・裏の五文字。
- 4) 中田祝夫 2006 によると、文明本『節用集』は名家に長く秘匿され、明治になってようやく存在が知られ、国語学者の目に触れるようになったのは戦後のことだという。現在は国立国会図書館に蔵され、デジタルコレクションで閲覧と画像のダウンロードが出来る。ちなみに、中田祝夫 2006 の「索引」は編者が「序」において「不備があり」「粗慢」だと断るように、単字の音読みですら遺漏が散見する。ここで取り上げた鶴字についても二箇所でクワウの読み仮名が確認できるが、「索引」には採録されない。それはともかく、江戸時代にはまったく世の中に知ら

れなかった文明本『節用集』の影響力はほとんど無視してよい。

- 5) 夢梅は易林本『節用集』の編者・易林と同一人物である（中田祝夫・北恭昭 1976）
- 6) 駐日公使アーネスト・サトウが江戸で購入し、一八八三年に大英博物館に納品された（福島邦道 1977）
- 7) 部首の数を一〇四としてあるが、第二十四番は欠番になっていて二十三から二十五に飛んでいる。したがって、本当の部首数は一〇三である。
- 8) 『文選字引』は家蔵の享保一九年（1734）初刻の安政二年（1855）九刻本によった。国立国会図書館デジタルコレクションに公開されている明治五年版も同様である。

## 【参考文献】

- 大野晋 1975『本居宣長全集第五巻』筑摩書房
- 岡井慎吾 1933『玉篇の研究』東洋文庫
- 岡井慎吾 1934『日本漢字學史』明治書院
- 語言研究所 1981『方言調査字表』（修訂本）商務印書館
- 小島幸枝 1978『落葉集総合索引』笠間書院
- 佐藤進 2014「金刀本保元物語の合拗音振仮名と『落葉集』」（『源平の時代を視る』思文閣）
- 関場武 1977「毛利貞齋編『増續大廣益會玉篇大全』」（『藝文研究』36（いま関場武『近世辭書論攷』慶應義塾大学言語文化研究所 1994 に収め、その後の調査による諸本の補充がある）
- 土井忠生 1971『切支丹語学の研究（新版）』三省堂
- 土井洋一 1986「解題」『天理図書館善本叢書 落葉集二種』八木書店
- 中田祝夫 2006『文明本節用集研究並びに索引』勉誠出版
- 中田祝夫・北恭昭 1966『倭玉篇研究並びに索引』風間書院
- 中田祝夫・北恭昭 1976『倭玉篇 夢梅本・篇目次第 研究並びに総合索引』勉誠社
- 日本語学会 2018『日本語学大辞典』東京堂出版
- 福島邦道 1977「キリシタン版落葉集解説」『キリシタン版 落葉集』勉誠社
- 福永静哉 1992『近世韻鏡研究史』風間書房
- 山田忠雄 1981『近代國語辭書の歩み（上下）』三省堂

# 清末の中国人留学生と「昆虫採集」、 そして浙江省「昆虫局」

SON Ansuk (孫 安石)

## 一 日中関係史の共同研究

神奈川大学人文学研究所の日中関係史研究会は、中国人留学生史研究という共同研究プロジェクトを進めており、いままで、大里浩秋・孫安石編として『中国人日本留学生史研究の現段階』（御茶の水書房、2002年）、『留学生派遣から見た近代日中関係史』（御茶の水書房、2009年）、『近現代中国人日本留学生の諸相』（御茶の水書房、2014年）、『中国人留学生と「国家」「愛国」「近代』』（東方書店、2019年）の4冊の研究成果を世に送り出している。

いまこの20年間を振り返れば中国人留学生をめぐる研究テーマは多様化し、従来の先行研究では注目されることが少なかった留学生の学費や財政の問題に注目した研究、留学生の日常生活に関する研究、中国人留学生監督処、清国留学生会館などに関連する研究など様々な進展が見られる。

筆者もこのような新しい研究動向に刺激を受けながら、2021年3月に開催された東京大学EAA オンライン・シンポジウム「一高中国人留学生と101号館の歴史」において「清末から民国時期の日本留学案内書の系譜一章宗祥『日本遊学指南』を中心に」というタイトルの口頭報告を行い、その後『留学生鑑』（啓智学社、1906年、中国語）を取り上げた論稿を

『近代東アジアと日本文化』（銀河書籍、2021年7月）に発表している。

とくに、『留学生鑑』を取り上げた上記の論稿においては、同書が日本国内の学生向けの生活案内書であった堤秋水『學生之寶』（松声社、東京、1902年）を、その体裁、形式、内容の面においてほぼ全面的に翻訳したことを紹介した。そこでは、『留学生鑑』が中国人留学生の日本での生活に必要な情報として訳出している「第一章 立志」以下の日本での住居、衣服、食物、睡眠などのほとんどの部分が堤秋水の『學生之寶』と同一の内容であることを指摘し、「第十五章 読書法」、「第十六章 記憶術」では欧米から輸入された読書法、記憶術という近代的な智識が日本に輸入され、そのあと、中国へ翻訳される過程について若干の考えを述べた<sup>1)</sup>。

本稿では『留学生鑑』後半の「第十九章 博物採集」が取り上げる昆虫採集という項目が当時の中国人留学生の目にどのように映っていたのか、または、学生が学ぶべき事項として認識されたのか、を紹介したうえで、1910年代の後半に中国の浙江省、江蘇省などで設立された「昆虫局」とはどのような関係があるのかについても、若干触れておきたい。結論から言えば、浙江省、江蘇省などに設立された昆虫局という組織は、農作物の病虫害の予防と駆除を担当した部署で、清末の中国人留学生が関心を寄せていた「昆虫採集」とは直接の関係はない事柄であるが、「昆虫」をめぐる日中の交流の一旦を窺う興味深い内容として書き留めて紹介することにした。

## 二 『留学生鑑』と昆虫採集、植物採集

『留学生鑑』の「第十八章 博物採集」が翻訳の底本とした日本の『學生之寶』は、博物採集の最初の項目として「昆虫採集」を取り上げ、昆虫採集の方法、標本の製法を説明している（【図1】を参照）。例えば、昆虫



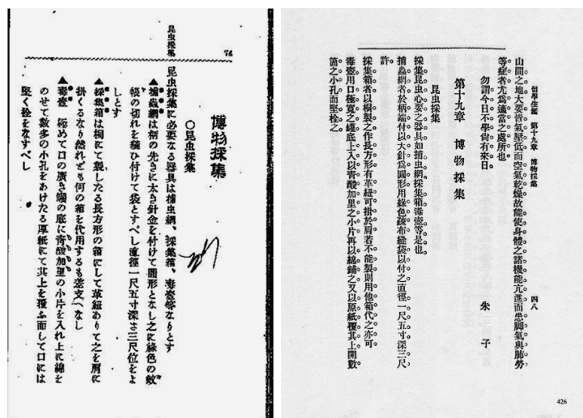
採集の方法では次のように記述している。

「天気晴朗なるとき山野を逍遙し草花の咲きたるところに行けば種々の美麗なる蝶類及び其他の昆虫の居るをみるべし。(中略) 甲虫類は樹木の腐りたる空洞の中に多く居るものなれば之を搜索すべし。また腐敗したる肉類を地上に置けば之に集まり来るものなり」<sup>2)</sup>

中国語の『留学生鑑』が「天気晴朗」で始まる部分から、腐敗した肉類を置けば甲虫が集まることを一字一句違わず翻訳していることには驚くが、このような正確な訳は「標本の製法」にもつづき、蝶類を標本とするときに使う展翅板の製法にもそのまま適用され、板は巾二寸長さ一尺位に切り、その上に巾八分厚さ六七分ほどの板を同じく一尺位に切った二本を並べ、中に溝ある展翅板を作る、としている。

続けて『學生之寶』は、植物採集に用いる採集箱として、ブリキ製の長二尺高五寸の円筒状のものに革製の紐を繫げ携帯することを提示し、専用

【図1】堤秋水『學生之寶』(1902年、左)と『留学生鑑』(1906年、右)の「博物採集」の部分



のブリキ採集箱がない時には茶入または海苔箱を代用しても良いとしているが、『留学生鑑』はブリキの翻訳として「布里幾」を当てながら、その代用品としての茶瓶と海苔箱を使うこともまた正確に翻訳している<sup>3)</sup>。

ここで博物採集に関する日本語の『學生之寶』と中国語の『留学生鑑』を紹介しながら気づくことは、20世紀初期の中国の学生にとっては昆虫採集、植物採集という近代的な生物の分類学が必要であるという認識が中国語で翻訳された『留学生鑑』の内容からうかがうことができるという点である。日本語の『學生之寶』にみえる博物採集（昆虫・植物・鉱石採集）という考え方が、明治時代の日本国内に紹介された昆虫採集に関する智識の蓄積の上に書かれているのは言うまでもない。

松良俊明の「『昆虫採集』の教育的意義についての一考察」によれば、日本における昆虫採集の先駆けは江戸時代にみることができるが、捕虫網で捕えた昆虫を針で刺し、ラベルを付けて保存するという近代的な昆虫採集が普及したのは明治初期のことで、とくに、1870年代後半から1880年代にかけては、学校の教員が昆虫採集に熱中し、その影響を受けた子供らの間でも昆虫採集が流行するようになった、という。その後1881年の「小学校教則綱領」によって、小学校の自然科学系の科目として博物が採用され「動物、植物、金石の標本等を蒐集すること」が明記されることになり、日本の昆虫採集の大衆化の流れは明治政府によって進められた、という指摘は極めて妥当な評価であると言えよう<sup>4)</sup>。

ところが、明治期の昆虫学においては、民間の流れとして日本昆虫学会が1917年に設立されたことが重要であるらしい。インターネットで公開された「日本昆虫学会 80 年の歩み」によれば、日本で最初の昆虫学専門の学会が創設されたのは1905年の「日本昆蟲学会」が嚆矢であったが、運営難から4年間で活動を停止し、のちの1917年に農務省林業試験場の矢野宗幹、木下周太、小島銀吉や農科大学の伊藤盛次らの呼びかけで「東

京昆蟲学会」が設立され、これが現在の日本昆虫学会の出発点である、という<sup>5)</sup>。

『學生之寶』が学生の余暇活動として博物採集という項目を設けたのは、ちょうどいま述べたような明治時代の影響を色濃く反映したものであり、清末の中国人留学生に日本の生活を紹介する『留学生監』は、日本人の博物採集という余暇活動に大いに興味を持ったことがわかる。

この余暇活動としての昆虫採集が1910年代の中華民国時期にどのように伝播したのかなどについては、いま一つ不明なところが多いが、中国における1910年代後半の昆虫をめぐる問題は、農業と病虫害との関係で各地方政府からも重要視され、1922年の江蘇省「昆虫局」の設立を皮切りに1924年には浙江省「昆虫局」が、そして、江西省、湖南省、河北省などに相次いで昆虫局が成立したようだ。

### 三 中華民国時期の浙江省「昆虫局」と日本

中華民国時期に各省に設立された「昆虫局」については、中国でも先行研究がいくつか発表されており、李志英の論考「昆虫局与農業虫害防治(1921-1937)」の論稿によってその概略をうかがうことができる<sup>6)</sup>。

李によれば、1919年頃から江南地方の江蘇省などでは農業、とくに綿業に被害を与える病虫害がたびたび発生し、大幅な生産減少がみられ、その対策の一環として1922年1月には、アメリカ人のカリフォルニア農科大学の Wood Worth を局長兼主任技師とした「昆虫局」が設置され、アメリカのコネル大学などに留学した中国人らが加わり、活動を開始したという。そのあと、1924年には浙江省にも「昆虫局」が設置され、いよいよ中国でも昆虫の分類研究、昆虫の生活研究、殺虫剤の研究などが本格化することになるが、これら農業と病虫害との関連の昆虫研究においては

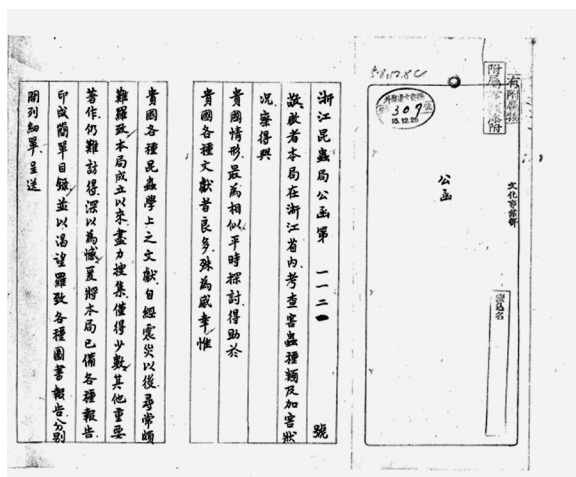
アメリカ留学組が大いに活躍した、という。この時期の昆虫局の活動については、『浙江省昆虫局概要』、『浙江省昆虫局年刊』（1934 年）などの資料が現存することから今後、その活動の究明が待たれるが、もちろん、これら昆虫局と日本との関係が全くなかったわけではない。

例えば、日本の外務省外交史料館の資料のなかの「浙江省昆虫局ニ図書寄贈」（請求番号 B05016027800、H-6-2-0-26\_004）には、1927 年を前後した時期の浙江省昆虫局が、日本の外務省を經由し、日本語による昆虫に関連する印刷物と図書の寄贈を依頼するやり取りが収められている。以下、これらの資料を手がかりに若干、日中の昆虫に関連する図書の寄贈関係について紹介していく。

ことの発端は、1926 年 12 月 15 日の日付で発信された浙江省昆虫局の公式書簡第 1121 号により始まる。すなわち、浙江省の昆虫局は、同省内の昆虫の種類及び加害状況を調べていたところ、農作物の被害状況が日本と近似していることから、中国側が保有している日本の病虫害の関連文献目録を提示しながら、昆虫局がまだ入手していない各種の書籍と昆虫標本などを入手したい旨を杭州の領事館を經由して求めてきたのである（【図 2】を参照）。

ところが、この要請を受けた日本の外務省は事情をよくつかめず、杭州領事館に浙江省昆虫局の現状などを調査するよう指示を出すことになる。その後、この調査を引き受けた杭州の領事館警察の末永金之助は、翌年の 2 月 1 日付きで杭州領事代理清野長太郎宛に「浙江昆虫局調査復命書」（以下、「報告書」と略称する）を提出している。この「報告書」によれば、浙江昆虫局は、浙江省嘉興県の城内の天寧寺街に位置し、独立建ての間口僅か 20 尺、奥行き 20 尺の二階建ての建物で一階に研究室と標本陳列所が置かれるのみの規模極めて小さい組織であったが、局長の費穀祥は事務熱心で相当な成績を挙げている、と評価している。そして、経費の面で、毎

【図2】 浙江昆虫局公函第1121号（一部）



（出典：外務省外交史料館「浙江省昆虫局二図書寄贈」、請求番号 B05016027800、H-6-2-0-26\_004、所収）

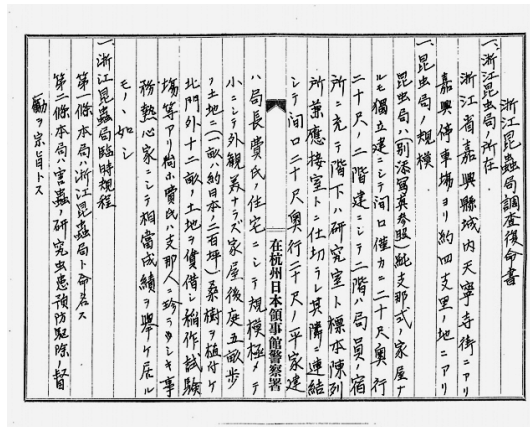
月浙江省財政庁より経費が支給され、毎年の経費は総予算額 6024 円で運営されていた、という（【図3】を参照）。

しかし、このような恵まれない状況の中でも浙江昆虫局は、優れた事業成果を残していたようで、「報告書」の項目「開辦以来の事業一般」は次のような内容を記載している。

「本局の事業は研究、宣伝及び駆除螟虫の督励を主とし其他の害虫及び螟虫駆除の状況は中華農学会報に登載し、其他出版物已に三十余种あり（比較的重要なるものは直接文化事務局に郵送）、更に局員の著作に係る比較的長編数種は経費の関係上自ら印行し能はざるにより上海商務印書館に印刷発行せしめ居れり。本年もまた陸續出版の筈なり」

浙江昆虫局から日本側へ出された昆虫学に関連する書籍と標本などの寄贈希望は、以上のような過程を経て、外務省文化事業部において再度、意

【図3】「浙江昆虫局調査復命書」(一部)



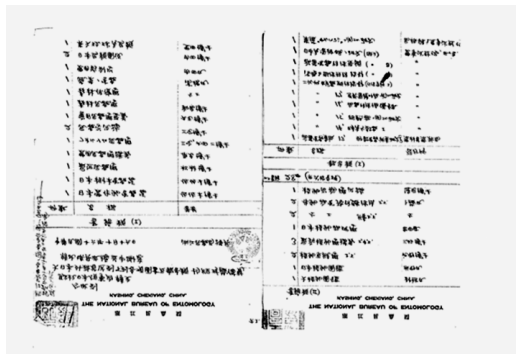
(出典：外務省外交史料館「浙江省昆虫局ニ図書寄贈」、  
請求番号 B05016027800、H-6-2-0-26\_004、所収)

見が収斂され、外務省文化事業部は1927年10月に昆虫局に対する図書寄贈の予算補助を正式に決定することになる。すなわち、日本側は、浙江省における農作物に対する予防、駆除研究を行う浙江昆虫局が、その研究の範を日本にとっており、参考図書の収集に努めているが、経費が不足していることに鑑み、約239円余に相当する図書を寄贈することにしたのである。

【図4】は、浙江昆虫局が杭州の日本領事館を経由して受け取った図書及び報告書類の詳細を記録した受領証である。

このような昆虫に関連する書籍の寄贈をめぐる外務省の対応は、日本のその他の官公庁をも刺激したらしい。例えば、農林省農務局は1927年4月に外務省の文化事業部宛に「印刷物送付に関する」という公文を送信している。それによれば、今回の昆虫に関連する書籍の寄贈は外務省が推進する日本と中国の文化事業として有意義であることは勿論、中国の農業の発展に日本が貢献できることで、両国の共存共栄という観点からも極めて

【図4】 浙江省昆虫局が受け取った書籍の受領証（一部）



（出典：外務省外交史料館「浙江省昆虫局ニ図書寄贈」、請求番号 B05016027800、H-6-2-0-26\_004、所収）

重要なことで、両国の今後の農業部門においても活発な交流を図りたいということを述べたのち、以下の印刷物を浙江省昆虫局宛に送付したいことを伝えている<sup>7)</sup>。

- 一 日本産介穀虫科デアスピ亜科に関する研究（其一）
- 一 浮塵子駆除予防指針
- 一 病菌害虫駆除予防主任技術官協議会要録
- 一 稻熱病に関する研究
- 一 菜菔サルサムルに関する研究成績
- 一 葡萄害虫「フィロキセラ」と其の防除法
- 一 馬鈴薯葉捲病に関する件
- 一 貯穀害虫及其の駆除予防に関する調査研究成績（第一報）
- 一 病菌害虫防除要綱
- 一 二化性蝗虫駆除予防奨励指針
- 一 日本産実蠅科に関する研究

## 一 日本産蜜柑蠅の研究

また、北海道農事試験場は、ちょうど時を同じくし、1927年3月には浙江省昆虫局が所蔵していない刊行物の内、報告第17号「キビクビシアブラムシに関する調査」、彙報第27号「苹果樹病虫害の防除」、彙報第36号「甜菜の病虫害と其の防除法」、彙報第39号「大豆の害虫防除」、彙報第42号「北海道農園芸害虫目録」を寄贈することを申し出ている<sup>8)</sup>。

## 結びにかえて

以上、本稿は清末の中国人留学生の日本生活を案内する書籍『留学生鑑』に昆虫採集という項目が取り上げられていることを紹介し、1920年代には江蘇省と浙江省などにおいて病虫害を駆除することを目的に「昆虫局」が設立され、また、日本との間では外務省を経由し、昆虫に関連する書籍と標本などの交換をめぐるやり取りが行われたことについて触れた。

中国人留学生史の研究という分野を開拓したさねとうけいしゅうは、1973年に刊行した『日中非友好の歴史』のはしがきに次のような一文を掲載している<sup>9)</sup>。

「この一世紀あまりは、日中間は、ざんねんながら、非友好の連続であった。この非友好を、よく見きわめ、その非友好の原因、根っこを、とりのぞいてしまわなければ、ほんとうの友好はやってこない。中国大陆において、日中両国がはげしくぶつかったのは、日清戦争、五四運動、日中戦争の三つの時代といえよう。」

ところが、この一世紀あまりの非友好の連続であったという定義のなか



で綿々と続いたのは、両国を行き来した留学生の交流であったように思える。この人的交流の流れを保証したのはときの政治であり、ときの経済条件であったことは間違いないが、そこで得られた成果は時には思わぬ方向へと発展したことがあったのではなかろうか。本稿がとりあげた清末の中国人留学生が注目した昆虫採集はその後、中国でどのように広がったのだろうか。また、中国の学校教育には果たして取り組まれることはあったのか、あるいは、学生の夏休みの課題としても定着することはなかったのか。1920年代の中国の各地で設置された「昆虫局」をめぐる日中の交流は、1930、40年代にはどのような展開を見せることになるのか、まだまだ興味は尽きない。

## 注

- 1) 本稿で取り上げた『留学生鑑』の原文は『中国近代教育文献叢刊』全24冊、浙江教育出版社、2020年3月所収を参考にした。
- 2) 堤秋水『學生之寶』松声社、東京、1902年、74～79頁。
- 3) 『留学生鑑』、前掲書、48～52頁を参照。
- 4) 松良俊明「『昆虫採集』の教育的意義についての一考察」、『京都教育大学環境教育研究年報』、第1号、1993年3月。
- 5) 日本昆虫学会の記述については、<http://www.entsoc.jp/about/ayumi.php>を参照のこと。
- 6) 李志英「昆虫局与農業虫害防治（1921－1937）」、『北京師範大学学报』、社会科学版、2017年、第3期、所収。
- 7) 外務省外交史料館「浙江省昆虫局ニ図書寄贈」、請求番号 B05016027800、H-6-2-0-26\_004、所収。
- 8) 外務省外交史料館「浙江省昆虫局ニ図書寄贈」、請求番号 B05016027800、H-6-2-0-26\_004、所収。
- 9) さねとうけいしゅう『日中非友好の歴史』朝日出版社、1973年。